

2016 年 3 月



オスロのノーベル・ピース・センター10周年記念

オスロの中心部にあるノーベル・ピース・センターは 2005 年に、2000 年におけるノルウェー国会（ストーティング）の決議を受け、文化省の部分的な援助のもとに、独立した財団の中心施設として設立された。最初の 10 年間に、160 万人もが訪問したノルウェーにおける最もポピュラーなミュージアムとなった。7200 もの学級の生徒がセンターの教育プログラムに参加した（1 日に 2 学級の割合）。それは、世界で最も権威ある賞に関して、展示、教育的ワークショップ、ディベート、セミナー、ノーベル賞受賞者の訪問などを通じ、あらゆる側面から広範な洞察を提供するために設立された。

これらすべての活動は、内容豊かでかつ豪華に図解された『平和を祈念して——ノーベル平和賞の 10 年に捧げる』と題する書物に記録されている。ノーベル・ピース・センターによって出版された 160 頁からなる本書は、情報・教育部長のリンダ・ネトランドと共にセンター長のベンテ・エリクセンが編集したものである。このセンターは 1990 年代の初頭、当時のノルウェー・ノーベル協会長であったガイヤ・ルンドスタッドによって構想された。そのルンドスタッドによるセンター設立の

経緯の叙述が本書の冒頭を飾っている。彼の後継者であるオラフ・ノヨルスタッド——センターの議長でもある——は、平和のための集会の場としての同センターの際立った重要性に焦点を当てている。センター長のベンテ・エリクセンが、センターがなぜ訪問者を惹きつけ、彼／彼女たちに平和を鼓舞するのに成功してきたかの理由について自身の見解を語っている。また建築家のダヴィッド・アジャエは、センターのデザインについて考察している。



ヨハネス・グランゼートによるノーベル・ピース・センター

展示に関する責任者のリブ・アストリッド・スヴェアドルップ——INMPの理事でもある——は、

内容豊富なそして良く図解された欄において、センターの開館以後制作された、芸術をも含む主として写真からなる 60 以上の展示について論評している。

その時々（2005 年から 2015 年までの）詳細な展示の総合的なリストが巻末に収録されている。これとは対照的に、常設の展示に当てられているのはわずかに 2 頁である。

参加者——子供、学生、先生、著名なノルウェー人、国際的な外交官など——の熱意あるコメント、さらには、主要なスポンサーや協力者とのインタビュー、そしてノーベル平和賞受賞者（そのほとんどが本センターを訪問したことがある）の祝辞も収められている。

毎年行われる主要な行事の 1 つとして、11 月に新しいノーベル平和賞受賞者の発表があり、彼／彼女がセンターの近くにあるオスロ・シティ・ホールで行われる授賞式に続いて、12 月 11 日に開会を宣言する大規模な展示がある。この輝かしいプロセスの全容が、この重要で人気のある毎年の展示の責任者であるスヴェアドルップによる、「平和を描写する」と題する内容豊かな素晴らしい欄に記述・記録されている。彼女が述べているように、訪問者が「どの年の、どの日にでも受賞者に会える」ことを可能にしている。マララの制服の物語はとりわけ印象的だ。それに続いて、教育、平和学習、そして子供のピース・センターの欄が適切にも配置されている。「平和を求めるところ」と題する欄では、リンダ・ネットランドが、この 10 年間行われてきたきわめて多様な 500 のイベントからの代表的な写真を選択・掲載している。それはセンターの重要性と大衆性を証している。

「ノーベル」という名は、美、創造性、卓越性、そしてインスピレーションといった資質を表現している。そうした資質は、記念出版としての本書

の性格を特徴づけてもいる。本書は、世界の「平和のチャンピオンたち」の啓蒙的な仕事の紹介を通じて、平和に捧げられたノーベル・ピース・センター／オスロの全体的な評価を与えるものである。こうして、12 月 10 日とその前後の日々だけではなく、年間を通じて、オスロは平和の都市であることをセンターは保証しているのだ。ノーベル・ピース・センターの最初の 10 年の物語は、平和教育者に、とりわけ陳列・展示・ミュージアムに関心をもつ平和教育者に、大きな関心を抱かせるものである。

ワルシャワのポーリン・ミュージアムにおける ノーベル平和賞受賞者ジョセフ・ロートブラット

近年創設されたミュージアムのなかで最も興味深いそして美しいミュージアムは、ポーリン・ミュージアム、すなわちポーランドのユダヤ人の歴史ミュージアムである。ミュージアムは 2005 年、ワルシャワ市、ポーランド文化・国家遺産省、およびポーランド・ユダヤ人歴史協会によって公式に設立された。1000 年に及ぶポーランドにおけるユダヤ人の歴史の中心的な展示は、2014 年に開始された。ミュージアムは、かつてユダヤ人・ワルシャワの中心であった地域に位置している。



ポーリン・ミュージアム

そしてその地は、第2次世界大戦においてナチスによってワルシャワ・ゲットーに変えられた地である。ミュージアムは、悲惨な運命をたどった1943年のワルシャワ蜂起の戦争犠牲者を祭る記念碑に面しているのだ。近くのヴィリー・ブランツト広場には、ヴィリー・ブランツトの「拝跪」モニュメントがある。それはドイツの首相が1970年の訪問のとき、ゲットー犠牲者の記念碑の前でひざまずく行動をとったことを記念している。そして、そのことは直ちに、ポーランドとドイツの間の和解のシンボルになった。

今年の後半にポーリンは新しい、想像力に富む、訪問者と展示が相互に働きかける展示空間を計画している。それは、25の肘掛椅子があるサロンから成り、それぞれの椅子は、ポーランド生まれのユダヤ人の豊かな歴史から選ばれた、ポーランドのユダヤ人だけではなく世界文化にも重要な影響を与えた傑出した人物を、象徴的に表現している。椅子にはタブレットが備え付けられており、それらには文化・科学・社会生活の各分野から選ばれた[椅子が象徴する]主人公の生涯と仕事とを表現するマルチメディアが付いている。加えて、それぞれの有名な人物に関する書籍や事跡を展示するキャビネットがある。それは訪問者が主人公の生涯や達成した業績をより深く探究することを可能にするだろう。

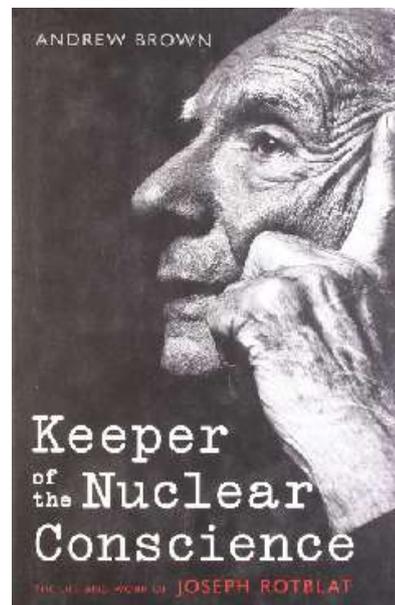
訪問者はこのように、傑出した人物と「良い仲間となって」、ある意味において彼／彼女らの環境の一部となり、彼／彼女らの美德を正しく認識し、対話さえできるようになるに違いない。

そうした人物のなかでもとりわけ卓越した人格は、1995年のノーベル平和賞の受賞者であるジョセフ・ロートブラット教授である。彼は、ヒトラーの支配するドイツが原爆開発を行っていないことが明らかになった時点で、第2次世界大戦にお

ける（原爆製造のための）マンハッタン計画から手を引いた唯一の原子科学者であった。

彼は残りの人生を英国で過ごし、主として「科学と世界の諸問題に関するパグウォッシュ会議」を通じて、核兵器のない、そして戦争のない世界のために力を尽くしたのである。彼はパグウォッシュ会議の創始者の1人であり、1995年にパグウォッシュ会議はロートブラットと共にノーベル平和賞を受賞した。

ロートブラット教授は、ブラッドフォード大学に平和学の講座を創設することを提唱した初期のスポンサーであった。1973年に平和学講座が開始されたとき、ブラッドフォード大学は彼に名誉博士号を授与する最初の大学となった。後には、ブラッドフォードに平和ミュージアムを設立することにも彼は支援を惜しまなかった。2005年の彼の没後、戦争と平和に関する書物のコレクションがブラッドフォード大学の図書館に寄贈された。一方、彼の多くの個人的な事跡は平和博物館に寄贈された。



「核の良心の守護者：ジョセフ・ロートブラット」
(アンドリュー・ブラウン)

2016年2月、ポーリンのチームがブラッドフォードを訪問し、ワルシャワで展示するために、事蹟の映像を撮り、文書を精査した。

エルンスト・フリードリッヒ (Ernst Friedrich) の「戦争に反対する戦争」

「戦争に反対する戦争」は、平和文学、平和教育における道標である。1924年の初版は写真に4か国語のキャプションが添えられ、その後十年再版が続き、80年代以降にあらたに再版された。



「戦争に反対する戦争」
エルンスト・フリードリッヒ著

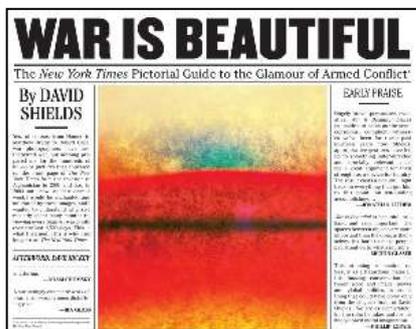
この本は約50万部売れたと言われ、その継続する影響力と重要性は日本語版でも示されている。ヨーロッパの平和博物館の先駆者であるジャン・ブロッホ (Jan Bloch) とエルンスト・フリードリッヒを日本で紹介することに尽力した坪井主税氏が1988年に翻訳した。この本ほど戦争の現実を際立たせた作品はなく、その反軍事的なトーンとメッセージは注目を浴びただけでなく、論争を巻き起こし、憎悪さえ呼んだ。写真は主に第一次世界大戦の戦場と兵士の死体や不具者となった兵士を写したもので、恐怖と野蛮がむきだしになった戦

争のリアリティはとりわけ若者世代に強い衝撃を与えた。それゆえに悲惨な戦争の勃発100年を記念するここ数年間にこの稀有の、驚愕に値する作品が再版されるのは極めて当然のことと言える。

2015年にベルリンでクリストフ・リンクス・フェルラグ (Christoph Links Verlag) が出版したこの再版本が特に歓迎されたのは、初めてエルンスト・フリードリッヒの生涯と業績にかんする30ページに及ぶ記述が衝撃的な写真とともに加えられたためである。「我に『敵』なし」と題したこの部分は、フリードリッヒの孫であるトミー・スプリー (Tommy Spree) が著わし、2000年にベルリンの「反戦博物館」から出版された同名の伝記に依拠している。1982年にベルリン市と同志の教師たちの支援を得てスプリーは、フリードリッヒが「戦争に反対する戦争」を出した直後に設立した「反戦博物館」—ナチスによって1933年に破壊された—を再建した。今まで載せられることのない最も酷く負傷した顔面写真を本に掲載することで長年のタブーを破ったフリードリッヒを歴史家のゲルド・クルマイヒ (Gerd Kurmeich) は新版の序の中で「コミュニケーションの天才」と呼んでいる。彼はまた「悲痛なことに戦争は今なお我々の身近にあり、当時と同様にメディアはその身の毛もよだつ現実を見せようとしない」と述べている。

「戦争は美しい：ニューヨーク・タイムズ・武力紛争の魅力への写真案内 (powerHouse Books) “*War Is Beautiful: The New York Times Pictorial Guide to the Glamour of Armed Conflict*” (powerHouse Books)」の著者・デイビッド・シールズ (David Shields) の結論も同じだ。2001年のアフガニスタン・イラク戦争以降、紙面トップに掲載された何千もの戦場写真 (特にカラー写真) を分析してシールズは「新聞は権力と政

府と共謀して非の打ちどころのない戦争ストーリーを作り、戦争がもたらす真の恐怖と人間の末路のありさまを隠ぺいする視覚映像を提供してきた」と締めくくっている。ベトナム戦争中には生々しく衝撃的な写真によって血みどろの戦いが視覚化された一方で、21世紀のアメリカの戦争は遠巻きに報道され、最新の武器による闘いがどれほど残酷なものであるはほとんど視覚的に伝えられてこなかったのである。



シールズによると、ごくわずかな例外を除き、ニューヨーク・タイムズはむしろ積極的に第二次大戦以降すべてのアメリカによる軍事行動を支援し、「戦争とは犠牲を払うに値する、貴くも誉れ高いものなのだ」という好戦的、男性的、軍事的な態度をとってきた。掲載写真の7割は戦争「賛美、美化、麻痺」に分類されるもので、残りの3割は「温和、曖昧」なものである。この本には重要な64枚の写真が再掲載されている。シールズのインタビュー「ニューヨーク・タイムズは近代武力紛争を賛美さえしているのか」と題するロビン・リンドレー (Robin Lindley ヒロシマ・ニュース・ネットワーク HNN) のウェブサイト記事は [こちらから see the article](#)

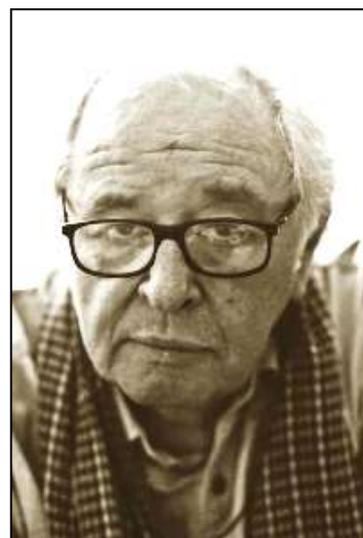
ベトナム戦争写真報道の第一人者の展覧会

今から50年前の1966年にウェールズ出身の写真家フィリップ・ジョーンズ・グリフィス Philip

Jones Griffiths (1936-2008) はフリーランス写真家としてベトナムに入り、数年間の活動後ベトナム写真集三部作を発表した。

「ベトナム株式会社 (Vietnam Inc.)」(1971) に収められた260枚の写真は、戦場の真実を暴き、アメリカの東南アジアへの侵攻を酷評、告発するものであった。タイム誌は「戦争報道の中で過去最高」と評したが、ほとんどのアメリカの新聞はあまりに生々しく、混乱をよび、破壊的だとして彼の写真の掲載を拒否した。しかし今や古典となったこの作品は、アメリカの世論を反戦へと転換させたと評価されている。ノーム・チョムスキーはのちに「もし政府の誰かがこれを読んでいたらアメリカはイラク、アフガニスタンで同じ過ちを繰り返さなかつたらう」と述べた。

1966年、グリフィスは後年その会長となるマグナムフォト(世界最高峰の写真家集団)に加入し、世を動かす世界的な写真家としての名声を確立した。彼のベトナムへの想い入れは生涯続き、「枯葉剤 (Agent Orange) 」(2003)、「平和なベトナム (Viet Nam ay Peace) 」(2005)の出版となる。



約半世紀にわたりグリフィスは世界の 100 以上の紛争地を撮影して回った。ベトナムと同様、彼の視線は侵入者やいわゆる「解放者」よりも、その土地の一般住民、そして犠牲になったものたちに向けられた。誇り高きウェールズ人のまなざし—「ダビデとゴリアテ」に象徴される反植民地主義—で世界を見つめ続ける彼の写真は、犠牲者たちの声を代弁した。

グリフィスの生涯と業績を讃える「ウェールズが目撃した戦争と平和 (A Welsh Focus on War and Peace)」と題した回顧展が、2015 年 6 月から 12 月にウェールズの町・アベリストゥイスにあるウェールズ国立図書館で開催された。彼が亡くなる直前に設立された「戦争研究のためのフィリップ・ジョーンズ・グリフィス財団 *Philip Jones Griffiths Foundation for the Study of War*」を通じてここには彼の豊富な作品・記録が保管されている。ウェールズ語のテレビ S4C は、彼のベトナム報道開始 50 周年記念に合わせてようにドキュメンタリー番組「ベトナム戦争写真家：フィリップ・ジョーンズ・グリフィス *Philip Jones Griffiths: Vietnam War Photographer*」を制作した。この財団は、将来世界の紛争地で取材する英国の若手報道写真家のための賞を創設することを計画している。詳しい情報はこちらから [here](#) 「ベトナム戦争を終わらせたウェールズ人写真家の物凄い写真 *The incredible images captured by a Welshman that helped end war in Vietnam*」感動的なインタビューはこちらから [here](#)

**「ケーテ・コルヴィッツを巡る都市ツアー」
(ベルリン)**

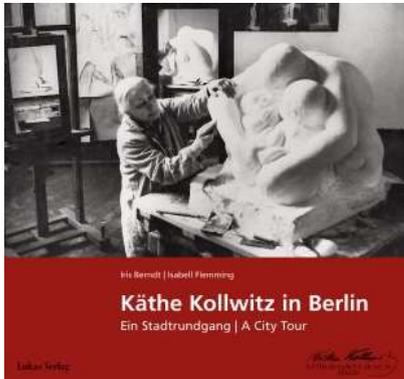
ケーテ・コルヴィッツ(1867-1945)の反戦美術—スケッチ、エッチング、リトグラフ、版画、彫刻—

は、20 世紀の最も重要な作品群だとみなされている。ケーテの芸術的才能は第一次世界大戦直後に、兵士の死を悼む忘れ難い表象を創り出し（そこには、18 歳で戦死した彼女の末息子も含まれている）、人々に戦争や軍備に反対、廃絶するよう促した。ケーテの親友であったエルンスト・フリードリッヒは、国際労働組合連盟 (アムステルダム) から出版された『反戦!』の多くの人気書の表紙に、ケーテのスケッチを用いているが、そこには極限の苦しみ、恐怖、不安を表す人間の顔が描かれている。子どもを守ろうとする痛切な母親の姿も、1920~1930 年代の化学兵器戦争への反対運動をする女性たちの出版物やポスターに用いられた。



ドイツ以外の国で、ケーテの作品を多く所蔵しているのは、沖縄宜野湾市の佐喜眞美術館である。ミシガン州デトロイトにある「剣を鋤へ」平和センター&ギャラリーでも現在、彼女の作品が 20 年ぶりに企画、展示されている。ケルンにある素晴らしいケーテ・コルヴィッツ美術館では、ケーテの作品の多くが常設展示されている。また、クーケラーレ (ベルギーのフランドル) の、彼女に捧げられた美術館でも同様である。その美術館はフラトスロ (Vladslo) 村の近くにあり、第一次世界大戦で戦死した兵士の墓地 (ケーテの息子も葬られている) には、印象的で心動かされるケーテの

作品、嘆く父と母の像が在る。最大規模のケーテ・コルヴィッツ美術館は1986年にベルリンに開館されたが、その地はケーテが生涯の大半を過ごし、故郷だとみなしていた場である。



彼女が住んでいた家は1943年の空襲で破壊されたが、戦況が悪化する中で彼女が立ち去った直後のことだった。ベルリンのケーテ・コルヴィッツ美術館は、図入りで編纂した新しい案内書を(ドイツ語と英語で)出版した。(ベルリンのケーテ・コルヴィッツ:都市ツアー, Berlin: Lukas Verlag, 2015, pp.56) この案内書はベルリンの、この美術館と友の会に委託され、とても受け入れ易く、魅力的に作られている。都市ツアーには美術館以外にも、ケーテが学んだ美術院やスタジオ(作品展示もしていた)、アーティスト仲間や家族と関わった場、通りや広場、彼女を敬い記憶を留める肖像、そして彼女のお墓などが含まれている。このケーテ・コルヴィッツを辿る路は、ヨーロッパ平和発見プロジェクトキャンペーンの一環として、2014年に出版されたベルリン平和路のブックレットに加わっている。INMPはハーグへの路を創り、ケーテ・コルヴィッツ美術館はブックレットの15番目の地として記載されている。

コルヴィッツは1867年7月8日にプロイセンのケーニヒスベルグ(現在のロシア、カリーニングラード)で生まれた。(そこはイマニュエル・カントの出生地でもある)



ケーテ・コルヴィッツ美術館

そのため、2017年には生誕150年記念祭を行なう。この新たな出版物は、多くのケーテの崇拝者がベルリンで彼女の足跡を辿ることを可能にし、他の人々が、偉大な芸術家で反戦活動家だった彼女を知るのにも役立つ。平和と社会正義を求める彼女の人生と作品は、世界中の人々を鼓舞し続けているのだ。

**デイトン国際平和博物館
平和の英雄・世界ウォークを始める**

2015年5月、デイトン国際平和ミュージアムでは最初の平和の英雄ウォークを行った。その成功に続き、ミュージアムでは「平和の英雄・世界ウォーク(PHWATW)」というプロジェクトの名のもと、米国内各地及びその他の場所での同様のイベントに着手している。例えば問題や対立への非暴力的対応において必要とされる知識やスキルなどの平和リテラシーを普及させるのがその目的である。このイベントでは教育と募金という2つの方法で、平和リテラシーを促進する。地域のコミュニティがウォークイベントを行う際、平和の英雄達の行動を示す3つの理念について学ぶことができる。



デイトン、平和の英雄ウォーク 2015年

すなわち、私たちの相互関連性の認識、正義の促進、報復の拒絶である。これら3つの理念を知り、それとともに生きる努力をすることが、平和リテラシーにとって欠かせないものである。同時に、ウォークイベントは、重要な平和教育プロジェクト（平和博物館やそのネットワークを支援など）を支援するための資金を集めるよう考案されている。こうした平和教育プロジェクトやイニシアティブの支援はまた、平和リテラシーの要となっている。

デイトン国際平和博物館はオスロのノーベル賞センターの「誰もがノーベル平和賞の受賞者になれるわけではないというわけでなく、むしろ誰にでも可能性がある」という見解と共通しており、誰もが平和の英雄を目指すべきだと考えている。当博物館では、危険を受け入れて暴力を減らし、世界をより公正な場所にする事ができる普通の人のことを平和の英雄だと定義している。平和の英雄ウォーク（行進や抗議ではない）の間、参加者らはポスターを掲げる。各チームがそれぞれ選んだ平和の英雄のポスターである。参加者は、イベント開始前に集まって話し、著名な平和の英雄たちのことを知り、平和の英雄たちがあらゆる階層の人であるということに気付き、そしてこれらの英雄たちの人生を導いた3つの理念を見出す。イベントの間（それは長時間である必要はない）、

様々な年齢、人種、社会的背景、宗教の人々が団結し、その像が高く掲げられた平和の英雄たちに代表される様々な平和の模範から学ぶのである。



平和教育に携わる同様の機会が、当平和博物館の外においても多数存在するが、それは想像力に富んだ大変成功している「平和の窓」プロジェクトに見ることができる。このプロジェクトは2014年、ウィーン平和博物館の創設者であるリスカ・プロジェクトによって始められ、有名無名の平和の英雄たちの大型写真（キャプション付き）を周囲の店や家の窓に展示した。このように、博物館の閉鎖時にはまた、その存在に気付いてなかった人をも含む多くの人々が、平和教育に触れることとなった。このテーマについては、1915年4月のハーグで行われた女性国際会議に関連する平和の女性らの像のプラカードが、その100年後ハーグの平和宮殿の門で20人の活動家ら（主に女性）によって掲げられた。その重要な会議（平和と自由のための女性国際連盟設立）の発起人であるアレクサ・ジェイコブス博士の半身像除幕式が平和宮殿内で行われ、博士の同志で世界の戦争を無くそうとしている女性平和運動家らもまた世に知られた。この華やかな式典は、ハーグの女性と平和のために活動しているペトラ・ケプラーによって準

備されたが、彼女は現在ハーグの INMP 事務局員として日々の業務に従事している。

上記の PHWAW 2016 に関する情報の多くは、デイトン国際平和博物館の事務局長ジェリー・レゲットの最近の覚書をもとにしている。ウォークイベントの共催に興味があればぜひ問い合わせしてほしい。

ジェリー・レゲットへの連絡は[こちらまで](#)。詳しい情報、2015年5月のデイトンでのイベントのビデオクリップや写真は、[こちらをクリック](#)。当博物館では、「非暴力期間」の2016年1月31日から4月30日の会期で平和リテラシーについての新しい展覧会を開きます。詳しくは[こちらをクリック](#)してください。

イ・ジュン平和博物館：ハーグ

ハーグにあるイ・ジュン平和博物館は、すべての朝鮮人にとって非常に重要な遺跡である。1907年に開催された第二回ハーグ平和会議に朝鮮の外交官であったイ・ジュンは参加しようとしたが、日本の圧力により排斥をされた。彼の悲劇的な死を遂げた所を記念したのが、その歴史的な建物である。その博物館は、第二次世界大戦後の朝鮮独立50周年記念の1995年にイ・ジュン学術基金

(Mr. Kee-hang Lee と Mrs. Chang-joo Song に1993年に創設された)によって開館した。2007年はちょうどイ・ジュン没百周年記念の年であったので、展示は韓国愛国者・退役軍人担当省と韓国独立記念館の協力を得て更新された。現在、長年使われなかった一回の大ホールの修復が大々的に行われている。そのホールの刷新により、かなり展示スペースが広がり、博物館全体の再概念化が必要となるであろう。博物館が拡張され展示が

更新されるのは2017年6月の予定であるが、その間も博物館の訪問者は歓迎されるであろう。



イ・ジュン平和博物館の前で

博物館の開館以来多くの様々な訪問者があり、何より韓国から訪問者が多くあった。2015年12月1日に素晴らしい訪問者が韓国から来館した。韓国海軍学校の最年長の生徒160人が、Jong-sam Kim 海軍総司令官と年長の士官と共に訪問した。彼らはまたハーグにあるイ・ジュン記念碑とお墓を訪問し、敬意を表しながら記念碑をきれいに磨いたのである。



墓地にあるイ・ジュン像を磨く。

韓国海軍軍艦二隻がオランダを訪問したのは、前例がない。博物館訪問の準備として、Chang-joo Song 館長(李夫人)は、訪問の前日に「1907年ハーグにおける朝鮮独立運動とイ・ジュン」という題の講義をするために海軍艦船に招待された。ハーグにおける朝鮮の独立運動の偉大な英雄の人

生と悲劇的な運命、そして貴重な遺産に多くの訪問者は驚嘆し、彼女の講義は歓迎された。韓国海軍学校の訪問には、朝鮮戦争(1950-1953)に参加し犠牲者を出したオランダの退役軍人に感謝の意を表する行事も含まれていた。

昨年博物館のメールアドレスとウェブサイトが次のように変わったことに注意して下さい。

yijunpeacemuseum@gmail.com

www.yijunpeacemuseum.com

ナチスの下での 良心的兵役拒否者・脱走兵に関する展示

1月9日から6月30日までオランダ平和・非暴力博物館は、ゴードの抵抗博物館の常設展示場で「抑圧と解放」と題した展示を行っている。ドイツナチスの脱走兵や良心的兵役拒否者の手紙や写真のコピーが展示されている。国家の戦争犯罪に信念に基づいて反対した勇敢な若者は、しばしば処刑という最大の犠牲を払った。この印象的で感動的な展示は、1989年ベルリンの反戦博物館&平和図書館の学芸員と約20名の協力者のチームによる独創的な研究に基づいている。忘れられた劇的な物語は、時として家族が痛みや(間違った)恥のため公表することに抵抗したが、家族に残された写真やお別れの手紙が紹介された。平和・非暴力博物館は、ベルリンのその博物館と親しい関係を維持しているが、いくつかの他の移動展示物が以前オランダの様々な場所で展示されたことがある。

その展示は時宜を得たものである。というのは、今年は第一次世界大戦中英国に徴兵制度が導入された百周年の年である。多くの若者が良心に基き武器を手にするのを拒否したのである。そのた

め投獄され、ひどい扱いをされ、家族は社会的に排斥されたのである。

現在の多くの展示の中に、「選択: 当時といま」があるが、それはブラッドフォードにある平和博物館によるものであり、ブラッドフォード市のプレイハウス劇場に展示されている。第一次世界大戦中の英国の約16,000人の良心的兵役拒否者の詳細は、帝国戦争博物館のウェブサイトですぐ入手可能である。展示、会議、その他の取り組みで彼らを称えることは、今日特にアフガニスタン、イラク、シリアのような国における残忍な戦争を避け、徴兵されて人殺しをしたり、あるいは殺されることを避けようとしている数多くの若者に注目する機会ともなるのである。



帝国戦争博物館

国境なき歴史家

歴史の解釈と表現に関する問題は、多くの平和博物館において重要であり、INMP国際会議において多くの報告書のテーマであった。平和博物館では学校の教科書やマスコミで公平に責任を持って取り上げられていない出来事をしばしば取り上げ、国内でも国際的にも論争を引き起こしている。平和博物館ではまた伝統的な戦争博物館と異なり、戦争や国際的な紛争を狭い国家主義的、軍事的視点ではなく、国際的な視点で表現する傾向がある。

このようにして真実、和解、平和の実現のための努力に貢献をしている。紛争予防、紛争解決における歴史の重要性、（そして恐れ、憎しみ、侵略を促進するために歴史の悪用を防ぐために、最近フィンランドの歴史家は「国境なき歴史家」という組織を立ち上げた。その設立会議は2015年6月にヘルシンキで開催され、ノーベル平和賞受賞者で元フィンランド大統領の Martti Ahtisaan が演説を行った。彼はまた「国境なき歴史家：紛争における歴史の使用と悪用」という題で、2016年5月19-20日にヘルシンキ大学でその新しい組織の第一回国際会議を開催する予定である。それはヘルシンキ大学、外務省、そしてフィンランド国際問題研究所によって後援される。基調講演者の中には、以前フランス外務大臣、厚生大臣、国境なき医師団（1999年ノーベル平和賞受賞）の共同創設者の Bernard Kouchner 博士がいる。



世界中の著名な歴史家は、「イスラエルとパレスチナの共通の歴史の執筆」「東アジアにおける歴史の存在：なぜ過去にこだわるのか」「1915年のトルコとアルメニア」「植民地時代の歴史か植民地主義の歴史か」というようなワークショップで語り手として重要な役割を演ずる予定である。またこの会議では「国境なき歴史家」国際ネットワークの設立を目的としている。詳細は [ここ here](#) をクリックして下さい。

出版物『平和博物館の紹介』

平和博物館に関する単著はまれである。従ってジョイス・アプセル(Joyce Apsel)による『平和博

物館の紹介』という本の出版は、喜ばしいことである。この本は「ルートリッジ(Routledge)博物館研究」シリーズの一冊であり、最初の平和博物館に関する総合的学術的研究書である。平和博物館による平和の文化の促進に関わっている学者、活動家、芸術家、教育者、学芸員、その他の博物館の専門家の国際的集団は広がりつつあるが、彼らにとって大変興味深い本となるであろう。著者は、次のように述べている。「この本は、平和博物館の批判的研究を奨励し、平和博物館の内容と目的という問題を分析することを目的としている。平和博物館の顕著な特徴は何であろうか。それらは、記念館や残虐行為のあった場所、そして平和のための博物館というより広い範疇のものとのように異なるのであろうか？」彼女は、平和博物館の特徴は、「その内容や活動が平和の文化を促進する歴史や考えを展示しており、平和の文化に関する理解を促進するセンターであり、平和の文化に関する教育を提供していることである」と論じている。

この本では平和博物館の紹介と結論の部分以外に4つの章があり、各章ではブラッドフォードの平和博物館（英国）、京都の国際平和ミュージアム、ゲルニカ平和博物館（スペイン）、デイトン平和博物館（米国）について事例研究がなされている。さらに第5章ではオスロのノーベル平和センター（ノルウェー）、平和の家（Peace House La Filanda）（イタリアのボローニャ付近）が取り上げられている。アプセル氏は彼女の著書を「平和博物館見本集」と適切に述べている。彼女は平和博物館に関してすでに出版されている多くの文献に目を通してだけでなく、この本で選ばれた平和博物館の訪問をして研究を行っている。彼女は平和博物館の創設者、館長、職員、ボランティアのメンバーや訪問者と話す機会を持った。ハー

ドカバーの本の魅力的な特徴はイラストであり、特に 16 枚のカラー写真である。多分このような理由でこの本は 90 ポンドという高価な本となったのであろう。



ジョイス・アプセル氏は、ニューヨーク大学国際・自由研究修士課程で人文科学を担当している。彼女は以前アメリカのアンネ・フランクセンターで教育指導者をしてきた。彼女はまた長い間 INMP 理事をしており、ニューヨークにある国連 NGO 広報課に INMP 代表として関わってきた。INMP は彼女の国連との連携の更新への努力とこの先駆的な著書の出版に感謝している。

平和博物館による平和教育

英国で出版されている『平和教育ジャーナル』誌は、国際平和研究学会平和教育委員会が後援している優れた専門誌であるが、2015 年 12 月号には「平和博物館による平和教育」という特集が組まれている。そこには次のような論文が含まれている。ロイ・タマシロとエレン・フナリによる「平和のための博物館：平和教育の推進者・手段」、渡辺美奈の「従軍慰安婦の歴史を継承する：日本における女性の博物館の経験」、谷川佳子の「平

和博物館におけるガイドを通じた平和教育の推進：立命館大学国際平和ミュージアムの事例研究」、エリザベス・ルイスとシャハリア・カテリの「化学兵器戦争の雲から平和の青空へ：イランのテヘラン平和博物館」、そしてティモシー・ガチャンガとムヌヴェ・ムチスヤによる「ケニアにおける平和博物館での異宗派の対話」である。



それらの論文の前には、ゲストの編集者であるピーター・ヴァン・デン・デュンゲンと山根和代による論文の紹介がある。

この専門誌は英国の Routledge/Taylor & Francis Group によって出版されている。この特集（12 巻 3 号）の詳細は、ウェブサイトをご覧ください。最初のページに要旨が書かれています。[here](#)



女性平和ネットワーク、ボン

11 月にボンの女性平和ネットワーク（Frauen Network Fuer Frieden, FNF）は、Else Mayer 財団の Elsa Mayer 賞の今年度の受賞者の一つとなった。Else Mayer 賞はドイツにおける女性解

放運動の先駆者のひとりである Else Mayer の名前にちなんだものであり、模範的な社会活動をした特筆すべき女性に与えられる賞である。FNF は過去およそ 20 年間の社会的な取り組みが認められた。FNF を代表し創設者で代表の、また NMP のメンバーでもある Heide Schuetz が受賞した。この財団は以前 (2013 年) 市の中心部にあるベルタ・フォン・ズットナーの名前にちなんだ広場に彼女の銅像を設置するために財政支援をした。



Heide Schuetz (中央)と他の 2015 年度 Else Mayer 賞受賞者

20 周年記念として FNF は 9 月 24 日にボンで行われる「ジェンダー、女性、平和」についてのシンポジウムを準備している。このイベントは国際ピースデー (9/21) にちなんだボンピースデーの一環となる予定である。ドイツにおける女性の平和運動に関する三年計画の一部として「ドイツ平和運動アーカイブ」財団(the Foundation 'Archives of the German Peace Movement')からの申し入れに従って、FNF のアーカイブの目録が目下専門的に作られているのは偶然のことである。FNF の 2015 年度下半期の様々な活動や、さらなる情報を知りたい人は 12 月のニュースレターの [ここ here](#) をご覧ください。

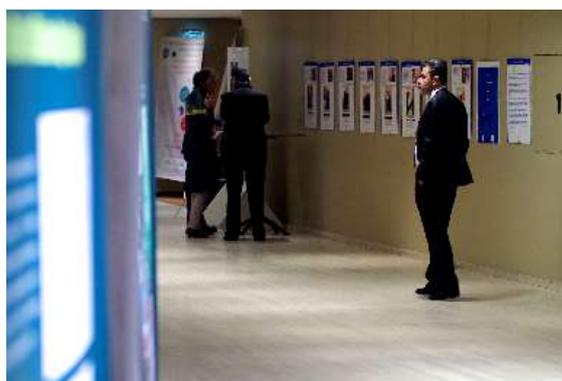
テヘラン平和博物館

2015 年 11 月 30 日から 12 月 4 日まで、化学兵器禁止条約 (CWC) の第 20 回締約国会議がオランダのハーグにおいて開催された。テヘラン平和博物館 (TPM) と化学兵器被害者支援協会 (SCWVS) から 2 名の代表が参加、いくつかの全体会議、化学兵器禁止条約連合の会合、サイドイベントにも参加した。

会期中、「平和のメッセンジャー」と題する展覧会もサイドイベントとしておこなわれた。TPM のオーラルヒストリープロジェクトをもとにしたこの展覧会は、化学兵器被害者やその専門家、さらにそれらの人々の平和実現のための努力に関する 10 のストーリーを展示している。

また、この秋には TPM は国際子どもデー (10/8)、国際ガールズ・デー (10/11)、経済・社会開発のための国際ボランティア・デー (12/5) などの国際デーを記念して積極的に活動をした。

詳しくは TPM の [website](#) へ。



テヘランでの「ピース・カウンツ」展

平和と開発のための世界科学デー (11/10) にちなんで TPM によって「Peace Counts (ピース・カウンツ)」のワークショップがテヘランの Shahid Rajaei 大学において 11 月 8 日に行われた。またテヘランの Allameh Tabatabai 大学の法政治

学部の教職員が12月13日から20日に「ピース・カウンツ」展を主催した。

「ピース・カウンツ」展は25枚のポスターからなり、世界中の平和に貢献したさまざまな人々を紹介している。この展覧会はドイツのBerghof財団の国際的な「ピース・カウンツ巡回展」プロジェクトの一環であり多くの国々で展示されている。



「平和博物館研究会」の紹介

福島在行

平和博物館／平和のための博物館に関連する日本での活動紹介として、「平和博物館研究会」を紹介させていただきます。

平和博物館研究会は2007年に結成されました。当時、平和博物館に関連する事柄について研究的視点から議論する場がほとんどなかったため、関西に暮らしていた数人の若手研究者の手により始められました。当初は、読書会やフィールドワーク、あるいは修士論文を作成中の大学院生の発表が中心でした。

2008年10月に京都と広島で第6回国際平和博物館会議が開催され、研究会のメンバーもその準備に携わりました。第6回会議で研究会のメンバーは幾人もの若手研究者と出会い、彼らが新たに研究会に参加しました。このころから研究会のメンバー数が徐々に増えていきました。2007年3月12日に京都で第1回の研究会を開催して以降、2015年末までに29回、開催しています。当初は京都や大阪での開催が主でしたが、2011年以降は、中心メンバーの一人が広島に転居したこともあり、

広島での開催も増えています。研究会は当初から現在まで規約を持たず、会費も徴収していません。そのため正確な参加者数は不明ですが、連絡用に開設しているメーリングリストの登録者は約40人です。それぞれの研究会には数人から十数人が参加しています。ホームページは開設していません。

研究会に参加している人たちの研究分野は、歴史学、博物館学、教育学、メディア論、平和学、人類学、憲法学、地域研究等であり、大学の研究者や大学院生の他、平和博物館の学芸員も参加しています。平和博物館は多様なテーマを有しており、さまざまな分野の研究者が議論することでその研究は発展していきます。そのためには、平和博物館研究会のように、さまざまな分野の研究者が、実践的な問題意識を持ちながら、議論を重ねることが重要になってくるでしょう。

平和博物館は多様なテーマを有しており、さまざまな分野の研究者が議論することでその研究は発展していきます。そのためには、平和博物館研究会のように、さまざまな分野の研究者が、実践的な問題意識を持ちながら、議論を重ねることが重要になってくるでしょう。近年の研究会の開催回数は、年に2回程度と、必ずしも頻繁に開催できていませんが、これからも継続して開催していく予定です。



広島平和記念資料館

中帰連平和記念館：埼玉

「中帰連」は正式には「中国帰還者連絡会」という。戦後シベリアに抑留された約 60 万人の中から約 1000 人が敗戦 5 年後の 50 年に旧ソ連から新中国に「戦犯」として引き渡され「撫順戦犯管理所」等に収容された人たちです。過去に多くの加害・虐殺をし処刑を覚悟していた彼らは、管理所で「人道的扱い」を受け「鬼から人間に戻してくれた」と感謝した。56 年の「特別軍事法廷」では一人の死刑も無期もなかった。周恩来が『制裁や復讐では憎しみの連鎖は切れない』と判決原案を 3 回も書き直させた結果だった。



起訴された 1062 人のうち有期刑は僅か 45 人で他全員「起訴免除」とされた。その 45 人もシベリアの 5 年と管理所の 6 年計の計 11 年が刑期に参入された。命を救われた彼らは帰国翌年の 57 年に「中帰連」を立ち上げ、高齢のため解散した 02 年まで自らの加害や虐殺を証言し反戦平和を訴えた。私たちはその思いを引継ぎ資料収集と提供を行っている。

【NPO・中帰連平和記念館】

〒350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6

TEL&FAX : 049-236-4711 HP

<http://npo-chuukiren.jimdo.com/>

E-mail : npo-kinenkan@nifty.com ML :

npo-kinenkan@freeml.com

郵便振込 : (00150-6-315918)

口座名義 : 「中帰連平和記念館」 年会員 : 5000

円 (カンパ・支援歓迎)

【開館日】 (水、土、日) 10:30~16:30 【会員・ML 参加者】 募集中



殉難した抗日烈士への謝罪碑

「鷹来工廠と学生たち：名城大学農学部にのこる戦争遺構」 渋井康弘 (名城大学経済学部)

名城大学農学部の農場は 1941 年開設の陸軍工廠 (名古屋陸軍造兵廠鷹来製造所) 跡地にあり、当時の司令棟は今も農場本館として利用されている。工廠では薬莖、弾丸、風船爆弾等が製造され、1945 年 8 月時点で約 4,150 名が働いていた。うち約 1,000 名は各地からの動員学徒で、他に金沢や浜松からの女子挺身隊もいた。当地には 1945 年 8 月 14 日にポンプキン爆弾 (長崎型原爆と同じ大きさ・形・重さの模擬原爆) も投下されている。

動員学徒が働き、模擬原爆も投下されたこの場所が、今日では若者の学び舎となっている。ここを訪れた人たちは、学びが平和の中でこそ約束されること、愛知が長崎とも広島とも繋がっていること、モノづくり愛知が兵器づくり愛知 (軍事工場の一大拠点) となっていたことが激しい愛知空襲の大きな原因であったこと、その空襲を生きのびた人々が兵器づくりを民生用のモノづくりに変

えて来たことが、戦後、愛知経済復活の1つの軸となったこと——こうしたことを実感できるはずである。報告者はこの戦争遺構を保存し、平和ミュージアムとして利用することを訴え、同僚や卒業生たちと保存運動を展開している。



農場本館の壊れた時計と窓の下に、
陸軍の星印が見えます。



編集ノート

編集委員メンバーは安齋育郎、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、ロバート・コワルチェック、山根和代です。翻訳は谷川佳子さん、竹田敦子さん、寺沢京子さん、藤田明史さん、幾波素代さん、山根和代が担当しました。INMPの会員そしてニューズレターの読者のみなさん、随時ニュースなどの投稿をお願いします。原稿は随時、英語で500単語以内、写真は1-3枚。あなたの名前と所属を書いて、news@inmp.net に送付してください。英語で書くことに困難がある場合には、INMP 日本事務局にご相談ください。

ひきつづきお願いします

平和のための博物館
国際ネットワーク
(International Network of
Museums for Peace, INMP)

を支え、さらに発展させるために、新たな会員を迎え入れることが期待されています。現在の年会費は2000円、日本での会員事務は、下記の「安齋科学・平和事務所」が代行しています。

INMP 日本事務局:

安齋科学・平和事務所 (ASAP)
※事務局は、月・水・金の午後13時~17時30分オープンしています。

第9回国際平和博物館会議

2017年4月10日~13日
ベルファスト(北アイルランド)



第9回国際平和博物館会議が、来年(2017年)4月にイギリス・北アイルランド地方の首都ベルファスト市で開催されます。北アイルランド紛争の名残のある「和解と平和の街」です。

メインテーマは「平和のための“生きた”博物館としての都市」です。発表の締め切りは2016年11月1日で、日本からも参加しやすいように、第8回会議(ノグンリ・韓国)の場合と同様、通訳・翻訳体制などを工夫したいと思います。

参加意欲をお持ちの方は INMP 日本事務局にお問い合わせください。